

## 選手が考える運動部活動指導者に対する信頼と依存

堀本菜美\*・荒井弘和\*\*

### Athletes' Perceptions of Trust and Dependence on Their Coaches

Nami HORIMOTO\* and Hirokazu ARAI\*\*

This study investigated athletes' perceptions of trust and dependence on their coaches. The results of the survey showed that the state of trust was characterized as "being able to accept the opinions of the coach honestly," and the state of dependence as "relying excessively on the coach." Furthermore, it revealed a relationship between trust and dependence on the coach. The results suggest that excessive trust in the coach may lead to dependence.

**key words:** power harassment, corporal punishment, cognition

#### 緒 言

近年、運動部活動における体罰などのパワーハラスメントが問題視されているにもかかわらず、体罰を肯定してしまう学生は一定数いることが明らかになっている(高橋・久米田, 2008)。高橋・久米田(2008)は、要因として選手と指導者間の信頼関係を指摘している。信頼とは「特定の当事者がもう一方の当事者の行為に対して無防備でいる心構えのできている状態」(Zhang & Chelladurai, 2013)である。

一方で、服従関係となり得る恋人関係に着目した研究では、恋人の暴力行為を「暴力」と認知しない傾向が現れる要因の一つとして、依存的恋愛観の強さが指摘されている(松並, 2020)。よって、選手の信頼も状態によっては依存として捉えることができるのではないかと考えられる。依存とは、面倒をみてもらいたいという広範かつ過度な欲求がある状態である(公益財団法人先端医療振興財団臨床研究情報センター, 2018; American Psychiatric Association, 2013)。

しかしながら、選手が指導者への信頼と依存をどのように考えているのか、さらに選手の自覚する指導者への信頼と依存の関連については明らかになっていない。そこで本研究は、

選手が指導者への信頼と依存をどのように考えているのかを明らかにし、実際に選手が指導者に抱いている信頼と依存の関連について検討することを目的とした。

#### 方 法

**調査対象者** 2021年7月に、首都圏の4年制大学の運動部に所属する大学生152名(男性121名, 女性27名, 未回答4名, 平均年齢 $18.95 \pm 0.91$ 歳)を対象として集合調査法による質問紙調査を実施した。

##### 調査内容

1. **個人属性** 年齢, 学年, 性別などについて回答を求めた。

2. **スポーツ指導者に対して信頼または依存している状態** 以下の質問に自由記述式で回答を求めた。

(1) 選手が指導者を「信頼(特定の当事者がもう一方の当事者の行為に対して無防備でいる心構えのできている状態)」している状態とはどのような状態でしょうか。

(2) 選手が指導者に「依存(面倒をみてもらいたいという広範かつ過度の欲求がある状態)」している状態とはどのような状態でしょうか。

3. **スポーツ指導者に対する信頼と依存の程度** スポーツ指導者に対してどの程度「信頼」および「依存」をしているのかについて、5件法(1:まったく信頼/依存していない, 2:あまり信頼/依存していない, 3:どちらともいえない, 4:ある程度信頼/依存している, 5:非常に信頼/依存している)で回答を求めた。

**調査手続き** 大学の授業開始前に、当該授業の履修者を対象に参加を依頼し、同意を得られた者に対して質問紙調査を実施した。本研究は、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会(承認番号:21-0028)の承認を経て実施した。

**分析方法** 自由記述は、収集された対象者の回答一つひとつを1カードとし、それらをKJ法によるグループ編成方法に従ってカテゴリー化した。作業は、選手が考える指導者への信頼と依存を探索することを目的として、スポーツ心理学を専攻する研究者1名およびスポーツ指導者の資格所持者2名で進めた。信頼と依存の程度の関連を検討するために、Pearsonの積率相関係数を算出した。

#### 結果および考察

**信頼または依存している状態のカテゴリー化** 収集された対象者の回答からカテゴリー化した結果、選手が指導者を信頼している状態は、計134ラベル得られ、19の小カテゴリーと8の大カテゴリーに分かれた(Table 1)。また、選手が指導者に依存している状態は、計143ラベル得られ、20の小カテゴリーと11の大カテゴリーに分かれた(Table 2)。

本研究において、選手が指導者を信頼している状態として最もカードが多かった大カテゴリーは、『指導者の意見を素直に受け入れることができる』であった。このことから、指導者からの指導や言葉を素直に受け入れられている場合、選手は指導者を信頼できていると感じることが示唆された。これに対して、選手が指導者に依存している状態として最もカードが多かった大カテゴリーは、『指導者を過度に頼りにしてし

<sup>1)</sup> 本研究を行うにあたり、ご協力いただきました町田和梨さん、西川慎悟さんに感謝いたします。また、本研究にご協力いただきました学生の皆さまに御礼申し上げます。

\* 法政大学スポーツ研究センター

Sports Research Center, Hosei University, 4342 Aihara, Machida-City, Tokyo 194-0298, Japan.

\*\* 法政大学文学部心理学科

Department of Psychology, Faculty of Letters, Hosei University, 2-17-1 Fujimi, Chiyoda-Ku, Tokyo 102-8160, Japan.

Table 1 指導者を信頼している状態

大カテゴリ	小カテゴリ
指導者の意見を素直に受け入れることができる (43)	指導者の言うことを素直に聞くことができる (20) 指導者の言うことを信用している (12) 指導者の言うことを受け入れて行動することができる (11)
指導者に選手自身の思いを伝えることができる (27)	指導者に相談ができる (13) 指導者に意見を伝えることができる (12) 指導者に質問ができる (2)
指導者に指導者としての資質があると選手が感じている (27)	指導によって良い成績が出ている (9) 指導者の指導方法を好んでいる (8) 指導者の人柄を好んでいる (7) 指導者が選手を理解していると感じることができる (4)
指導者と互いにコミュニケーションをとることができる (22)	指導者と互いにコミュニケーションをとることができる (8) 指導者と気軽に話ができる (7) 指導者と互いに意見を伝えることができる (7)
指導者がプレイヤーズセンターなコーチングをしてくれる (7)	指導者が選手に任せてくれる (3) 選手の好きなことができる (2) 選手を尊重してくれる (2)
指導者と同じ部分がある (3)	指導者と同じ部分がある (3)
指導者に弱い部分を見せることができる (3)	指導者に弱い部分を見せることができる (3)
選手が指導者の悪口を言わない (2)	選手が指導者の悪口を言わない (2)

※ ( ): 得られたラベル数

Table 2 指導者に依存している状態

大カテゴリ	小カテゴリ
指導者を過度に頼りにしてしまう (49)	選手自身で何も考えない (20) 指導者にあらゆることを聞いてしまう (13) 指導者を頼りにしてしまう (8) 指導者に練習内容を全て任せてしまう (8)
指導者がいないと動くことができない (31)	指導者の指示がないと動くことができない (20) 指導者に言われたことしかできない (7) 指導者不在では何もできない (4)
指導者の言いなりになる (17)	指導者の言うことに従ってしまう (10) 指導者の言うとおりに行動してしまう (7)
指導者を強く信じてしまう (13)	指導者を過度に信じてしまう (5) 特定の指導者のみを信じてしまう (4) 指導者の理不尽な指導を受け入れてしまう (4)
指導者に気に入られたい (8)	指導者の気を引きたい (6) 指導者に気に入られたい欲求が強い (2)
指導者の存在をモチベーションとしている (7)	指導者の存在をモチベーションとしている (7)
選手自身のプレーがうまくいかない (6)	選手自身のプレーがうまくいかない (6)
指導者との距離が近い (5)	指導者との距離が近い (5)
指導者の顔を何う (3)	指導者の顔を何う (3)
指導者を独占したい (2)	指導者を独占したい (2)
指導方法を好む (2)	指導方法を好む (2)

※ ( ): 得られたラベル数

まう』であった。依存には「自信のなさ」や「自分で意思決定できない」といった特徴があることから (竹澤・小玉, 2004)、指導者に依存している場合にも、指導者の指示なしでは何も考えられないという状態が生まれると考えられる。また、依存している状態では、「指導者の理不尽な指導を受け入れる状態」という小カテゴリが得られた。理不尽な指導であることを認識しているにもかかわらず受け入れてしまうということから、選手は、指導者への依存によって、体罰などのパワーハラスメントに対する認知が歪むと考えている可能性が示唆された。

さらに、信頼している状態は、「指導者に選手自身の思いを伝えることができる」や「指導者と互いにコミュニケーションをとることができる」といった相互の関係性も築くことができている状態であった。これに対し、依存している状態は、「指導者を過度に頼りにしてしまう」や「指導者がいないと動くことができない」、「指導者の言いなりになる」などの、指導者側の考えや指導に一方的に従うだけのものであった。このことから、選手は指導者の考えを一方的に受け入れるだけでなく、自分の考えなどを指導者に伝えることのできる状態を信頼と考えており、指導者の考えを一方的に受け入れるだけとなっている状態が依存である可能性が示唆された。

以上のことから、選手が主体的にコミュニケーションをとっていないと信頼が依存へと変容してしまう可能性が考えられた。

本研究は、具体的な信頼の状態や依存の状態について量的調査の段階で示すことができず、それぞれ1項目で測定を实

施した。今後は、本研究の結果から明らかになった信頼している状態および依存している状態をもとに、選手がどの程度それぞれの状態を感じているのかを検討することが期待される。

## 引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). Washington, DC: American Psychiatric Association. (アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野 裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院)
- 公益財団法人先端医療振興財団臨床研究情報センター (監訳・監修) (2018). 依存性パーソナリティ障害 (DPD) MSD マニュアルプロフェッショナル版日本語版.
- 松並知子 (2020). 高校生における依存的恋愛観の心理的要因およびデートDV暴力観との関連——ジェンダー差に着目して—— 日本健康相談活動学会誌, **15** (1), 52-57.
- 高橋豪仁・久米田恵 (2008). 学校運動部活動における体罰に関する調査研究 教育実践総合センター, **17**, 161-171.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, **52**, 310-319.
- Zhang, Z. & Chelladurai, P. (2013). Antecedents and consequences of athlete's trust in the coach. *Journal of Sport and Health Science*, **2**, 114-121.

(受稿: 2021.12.27; 受理: 2022.7.25)